

令和七年度 推薦・特別選抜（社会人） 入学試験問題（国語）

受験 番号		氏名	
----------	--	----	--

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

現代を生活している私たちの「老い」は、百年前の漱石そうせきたちの時代の「老い」とは決定的に異質なものになっていると思います。まず、従来イメージされてきた老いと現在の状況を比較してみましよう。

「老い」で思い浮かぶのは、肉体の衰えや思考力の低下についてです。これはいまも相変わらずそうだと思います。しかし、食習慣や高度医療、あるいはいろいろな文化的ファクターのせいでしょう、いまのシルバー世代は昔の同じ世代より格段に若くなっています。少し前は六十歳定年が当たり前でしたが、いまの六十歳は精神的にも肉体的にもインキョあするには早すぎます。

次に思い浮かぶのは、老人は「分別」する力を持ち、「老成」した賢さを持っているというイメージです。しかし、いまの老人はそういう感じでもありません。また、われわれの世代が十年、二十年後に、分別のある賢い老人になっているだろうか考えると、たぶんそうはなっていないと思います。

そして、かつて老人は「枯淡」なものであり、妙な色気を持つてはいけなさとされてきました。イツダツとすると「年甲斐もない」と。グイベツいの目を向けられました。ちなみに漱石は、父が五十一歳、母が四十二歳というかなり遅い年齢で生まれた子で、それゆえに「恥」として里子に出された経験を持っています。このことは漱石の心に大きなトラウマを残したのですが、これを見ても、当時の人の考え方がよくわかります。

しかし、現代では、かなりの高齢者にも恋愛があり、セックスがあります。「老人の性」はもはや当たり前という時代です。そのように見ていくと、かつて言われていた「老人とは分別があり、老成していて、枯淡な存在である」というイメージは、現代においては、ほとんど崩れつつあると言えるでしょう。

「長老」という言葉があるように、従来、老人の知恵というものは社会にとって貴重な存在でした。映画『アラビアのロレンス』の最後に、老練な族長のファイサルが、ロレンスをちよつと哀れおもひげに慮りながら、「若者は戦争で戦い、老人は政治を行う」といった意味のことを言うシーンがありますが、まさにそれです。

政治学の世界でも、「長老政治」というのはかなり重要な概念でした。しかし、日本にはもう長老は出てこないだろうし、カリスマも出てこないだろうという気がしています。

では、日本はこの先どうなっていくのでしょうか。プラトンの『国家』には、子供というものは共有にすべきだと説かれています。ある種の「原始共产制」です。プラトンがそう考えたのは、子供が「理想国家」を乱す攪乱かくらん要因になることを恐れたからではないでしょうか。

これにならえば、いま、「老人とは何か」を考えると、子供と同じように、「社会の規範からはみ出した者」と考えることができるのではないのでしょうか。なぜなら、定年を迎えて無職になれば、少なくとも「社会人」ではありません。非労働人口として生産活動の枠からはずれず。シルバーパスやフルムーンのような各種割引、いろいろな施設の「老人無料」などの優遇があることを考えると、積極的な消費者でもありません。どこか「未成年は無罪」と似たようなフリー状態になるのです。そんな高齢者が、いま大量に世に放たれようとしているのです。

かつては「老人」の持っている力は社会の暴走の歯止めになる、つまり「安全弁」になると考えられたものでした。しかし、いまのわれわれの世代がもう少し年を取ったとしても、社会の安全弁などには、おそろくならないでしょう。「老人は権威によりかかる」とか、「老人は保守的である」とか言われてきましたが、今後はそれもあてはまらなくなる可能性が高いのです。

ゆえに、これからの「老人力」とは何かと問われたら、「攪乱する力」である、と私は答えたいと思います。

子供はどんどん減っていきませんが、老人はどんどん増えていきます。ですから、この社会は、もしかするとアナキーなほうに向かうのではないかという気も少ししています。とはいえ、これは悪い意味で言っているわけではありません。老人の「攪乱する力」は、生産や効率性、若さや有用性を中心とするこれまでの社会を、変えていくパワーになると思うからです。

ところで、かく言う私も、四十代末ごろ、年を取ることに恐ろしい時期がありました。自分の気力、体力が衰えていくことを考えると、

この先どうすべきなのかわからなくなったりしました。得体の知れない不安に襲われて、無性に気が滅入ることもありました。最近は何にも更年期障害があると言われていますが、それだったのでしょうか。一種のうつ状態だったと思います。

しかし、それが吹っきた後、妙にサバサバして、「この世の中に、怖いものなどあるか」といった心境になったのです。

そうなるまでにはかなりの葛藤がありました。私にとって大きなきつかけとなったのは、そのころに「ソウグウ」したいいくつかの「死」だったと思います。

最大の転機になったのは、両親の死です。在日である私にとって、熊本にいる両親は何かがあつたときに帰っていくことができる、最終的なよりどころのような存在でしたから、喪失感はありませんにも大きく、私は深く落ちこんでしまいました。しかし、『それから』の代助ではありませんが、それによって、決定的にこの世という下界に落ちることができたのかもしれない。

親友の死も経験しました。学生時代から喜びと苦しみを分かちあつてきたかけがえのない友人です。しかし、彼とのつながりを想いめぐらす中から、逆に自分というものを再確認できるところもありました。

むろん、大切な人と別れることは悲しい。へたりこみそうになります。しかし、それを何度か繰り返すうちに、自分の中で何かが変わつてきたのです。死というものに対する心構えのようなものができて、「死を引き受けてやろう」といった気持ちさえ持ちました。

もちろん、いつもそんなに「達観」できるわけではありません。やはり、死が恐くなくと言えば嘘になります。しかしそれでも、ぼんやりとはあれ、死に対する心構えのようなものができるようになったのです。別の見方をすると、私は他者の死によって、うつ状態から救われたと言えるかもしれません。

究極的に言うと、人間にとつて最大の恐怖は「死」です。であるとすれば、「老人力」とは「死を引き受ける力」でもあるでしょう。

また、こうも思います。かつてのようにピラミッド型の人口構成の社会であれば、老人は少数派であり、「死」は特別なものであり、やはり恐ろしいものだったでしょう。だからこそ、人びとは「あの世へ行けば苦痛から救われる」などと、死への意味づけをいろいろ行い、自分たちが耐えられるものに置き換えていたのです。

しかし、これだけ高齢社会になると、死はありふれたものと化します。特別な意味を持たなくなり。これは虚無的に言っているのではありません。死を軽んじているのではありません。私は、死を「イフ」するゆえにいろいろ意味づけするのはまったく逆に「覚悟してまゐること引き受けてしまえばよい」と思つたのです。

そもそも、子供に死に対する恐れがないのは、死というものを知らないからです。死からもうとも遠いからです。であるならば、死に対する恐れのない子供に返れということです。

しかし、ここで強く言いたいのは、同じように「恐くない」でも、子供のように「知らないから恐くない」ではなく、知つたうえでの、少なくとも死について考えをめぐらし、心構えのようなものを持つたうえでの「恐くない」であるべきだということです。

そのためには、自分の人生について悩みぬくことが必要だと思います。それを避けていたら、たぶんいつまでたつても恐いでしょう。おかげで私はいま、いまだかつてないほど開き直つていて、大げさに言うと、「矢でも鉄砲でも持つてこい」という気分になることもあります。

(姜尚中『悩む力』二〇〇八年発行による)

注一 夏目漱石の代表作の一つ。代助は主人公。

問一 傍線部 a s e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部①は「老い」のイメージの従来と現在の「比較」を行うと言っていますが、取り上げられた比較の観点を、本文中の言葉を用いて簡潔に全て箇条書きで抜き出さなさい。

問三 傍線部②の老人が「社会人」でなくなるという意味を、本文の内容を踏まえてわかりやすく答えなさい。

問四 傍線部③の「攪乱する力」と対置する言葉として用いられている単語を抜き出さなさい。また、老人力を「攪乱する力」と捉えるのは、老人の存在をどのように捉えているからか、端的に表している表現を抜き出さなさい。

問五 傍線部④の「死を引き受ける力」とは、どのような力のことを言っていますか。本文中から抜き出さなさい。また、そのような力は、どうすることによって得られると考えていますか、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問六 本文では、老人力について書かれています。著者が老人力を簡潔に表している言葉を抜き出さなさい。一つとは限りません。

二 次の詩を読んで、下の問に答えなさい。

さんたんたる鮫鰯^{あんこう} 村野四郎
へんな運命が私をみつめている
リルケ

顎^{あご}を むざんに引っかけられ
逆さに吊り上げられた
うすい膜の中の
くったりした死
これは いかなるもののなれの果だ

見^みなれない手^てが寄^よつてきて
切りさいなみ 削りとり
だんだん稀薄になつていく この実在
しまいには うすい膜も切りさられ
もう 鮫鰯はどこにも無い
惨劇は終っている

んにも残らない廂^{ひさし}から
まだ ぶら下っているのは
大きく曲った鉄の鉤^{かぎ}だけだ

問一 この詩は、昭和二十九年の作で、暗喩の代表的な作品です。暗喩は、「〴〵のようだ」などの比喩であることを明示する表現を用いずに比喩する表現で、メタファーとも呼ばれます。この詩の鮫鰯は、何のどのような側面を比喩しているか、わかりやすく説明しなさい。

問二 傍線部の表現の視点は「寄って」こられる鮫鰯側にあります。同様に、鮫鰯側の視点で描かれている部分を抜き出し、逆に鮫鰯と対照的な存在として描かれているものを抜き出しなさい。